七戸町立 鷹山宇一記念美術館

第24号
【平成13年9月15日】

SUPORTERS CLUB NEWS
友の会 会報
TAKAYAMA-UICHI MEMORIAL MUSEUM OF ART

〒039-2501
青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94
七戸町立鷹山宇一記念美術館内
鷹山宇一記念美術館友の会
TEL 0176-62-5858　FAX 0176-62-5860

夢と想い出を残した開館

藤子・F・不二雄の世界展で開館以来の記録

オープン以来の累計入館者数 15万人を突破(8月18日)

1日の入館者数(8月26日) 1,101人!

期間中入館者数 25,455人

＜子どもの頃、僕は「のび太」でした……＞

「ドラえもん」「パーマン」「オバケのQ太郎」などの多くの作品で、子ども(とかつて子どもだった)大人たちに夢と希望に満ちたファンタジーワールドを発表し続けた藤子・F・不二雄の世界に触れる企画展が、(財)鷹山宇一記念美術振興会と東奥日報社との共催で開催されました。

昨年、大盛況のうちに閉幕した「手塚治虫の世界展」に引き続き、家族の夏休みの想い出となる企画展を目指して、藤子プロをはじめとする各方面よりの御協力を得ながら準備を進めてきたものです。

7月19日から9月2日までの期間中、美術館は家族連れや子どもたちのグループなど多くの来館者で連日にぎわい、鷹山館長をはじめ美術館スタッフの忙しさは大変なものでしたが、美術館開館以来の記録となる数々の数字を残して無事閉幕することができました。

本展の運営に賜りました友の会会員の皆様の御協力に、心より御礼申し上げます。

会場前でテープカット 左より　鷹山増子名誉館長/田島政義町議会議長/平山隆小学館児童・学習編集局チーフプロデューサー/成田榮子青森県副知事/福士孝衛町長/外崎勝東奥日報社常務取締役・事業局長/伊藤善章藤子プロ代表取締役

7月19日、テープカットに先立ちオープニングレセプションが美術館に隣接する道の駅しちのへ内「レストラン絵馬」において開催されました。

席上濱中常務理事が「子ども達に夢と希望を与える催しを企画しました、多くの来館者をお待ちしています。」と主催者挨拶を述べ、来賓の成田青森県副知事が「子どもの健全育成を政策課題としている青森県としても大きな期待を持っています」と祝辞を述べられました。

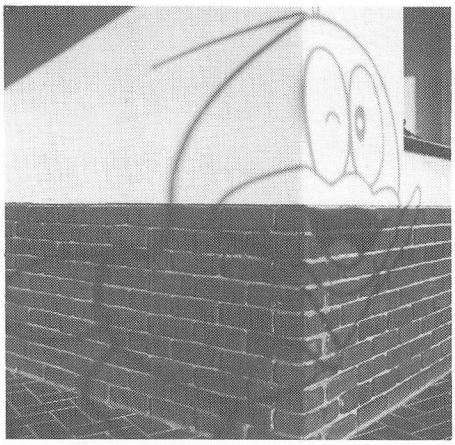
また伊藤藤子プロ代表取締役が、「藤子・F・不二雄の世界展を青森県で開催できることは、スタッフ一同の喜びです」と感謝の言葉を述べられ、最後に本展の盛会を祈って東奥日報社外崎事業局長の音頭で一同リンゴジュースで乾杯をしました。

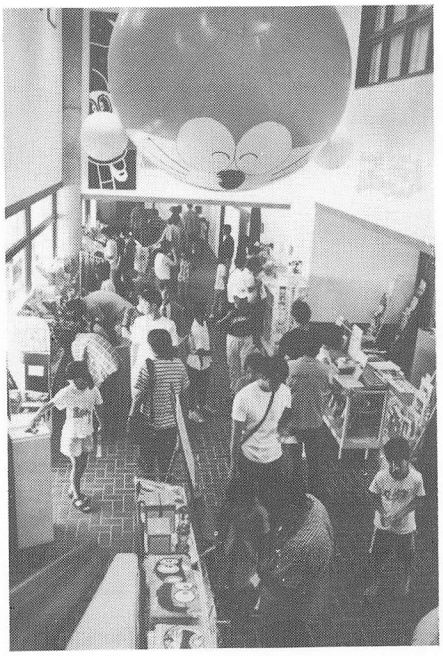
美術館は世代を超えた藤子ワールド

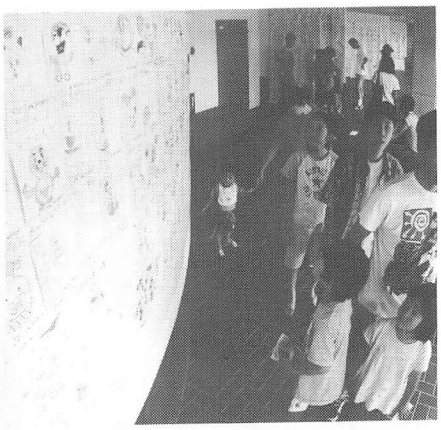
藤子・F・不二雄展の会場となった美術館の各所には、デビュー以前の習作時代や伝説的なトキワ荘時代にまで遡る貴重な資料をはじめとして多くの作品・キャラクター・資料などが展示されました。

また会場の壁面には来場した子どもたちが自分たちの夢を描いた藤子先生へのメッセージが掲示され、その数は会期中に2千枚近くに達しました。

地方の小規模な美術館としては規模・予算ともに不安の残る今回の企画でしたが8月26日の入館者数1，707人、会期中の入館者数25，455人はいずれも企画展としての開館以来の記録であり、各方面よりのご理解ご協力により無事に閉幕したことに深く感謝申し上げます。







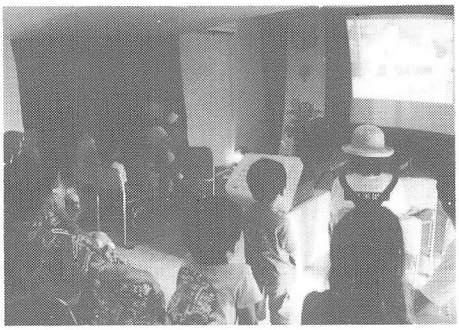
上　鷹山美術館にオバQ参上
中　ドラバルーンの下で記念のおみやげをセレクト中
右　会場には藤子先生へのメッセージを掲示
下　友の会協力のアニメシアターは、昨年に引き続き連日大好評

友の会も運営に協力

今回の企画展に対しては友の会会員から、レセプションの手伝い・監視ボランティアスタッフなど例年以上に積極的な協力が寄せられました。

特に昨年に引き続き、友の会では映像資料として藤子・F・不二雄氏のアニメーション作品を購入して館内の特設シアターで連日上映しました。

館内に展示されている作品成立の背景となる貴重な資料を見た後に、これらの作品を鑑賞すると、あらためて藤子・F・不二雄のS・F（少し・不思議な）ワールドを再認識できるような気がしました。



エッ！美術館から号外を発行？

東奥日報社移動編集局を開設

今回の藤子展を共催した東奥日報社では、同展の情報や館内の展示の模様を紙上で詳細に報道して下さいました。

中でも8月11・12日の両日には、美術館2階工房に移動編集局を開設し、家族連れで賑わう館内の様子を取材編集し、上北郡の各所で号外を発行しました。

最新の機器を利用して、瞬時に紙面を編集し次々と号外が印刷される様子を来館者達は興味深く見つめていました。

特に12日は藤子展オープン以来の来館者が1万人を越えた日に当たり、このニュースが移動編集局発として紙上を飾る成果が得られました。

記念講演会を開催

藤子先生の思い出を語る

会期前日の7月19日午後美術館2階工房で記念講演会が開催されました。

長年、藤子・F・不二雄先生の担当として多くの作品の編集に携わってこられた小学館児童・学習編集局チーフプロデューサー平山隆氏が藤子先生の人柄とご家族、作品誕生の背景などについて、今回展示されている資料に触れながら思い出を交えてお話をされました。

また藤子作品を引き継いで制作されている漫画家のむぎわらしんたろう先生が会場で、来館者にサインをするコーナーも設けられました。

鷹山宇一記念美術館 News&Report
2001-9-15

鷹山宇一記念美術館の特別企画展／秋・冬

皆様のご来館をお待ちしております

ごあんない

【Part 1】

9月29日(土)→10月28日(日)会期中は無休

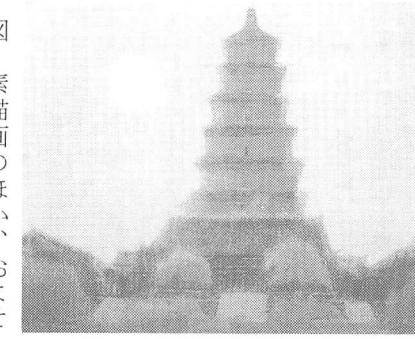
薬師寺玄奘三蔵院「大唐西域壁画」完成記念 平山郁夫 大下図・スケッチ帖・素描画・資料展

20世紀最後の大晦日、奈良・薬師寺玄奘三蔵院絵殿で、「大唐西域壁画」の開眼供養・入魂式が行われました。

「玄奘三蔵に捧ぐ」との主意で、発願からおよそ30年、実制作期間20年という歳月をかけ完成させたこの壁画は、平山郁夫画伯の玄奘三蔵への崇敬と報恩謝恩の心から描かれ捧げられたものです。

かつて、原爆の後遺症に苦しむなか平山画伯は、生命の危険をおかしながらインドから多くの経論を持ち帰った玄奘三蔵の姿を描いた《仏教伝来》を制作し、この作品は「画家として本当の意味でのスタート」をきる記念すべき作品となりました。壁画は、これ以来玄奘三蔵の歩いた道を画家自ら追体験するという長旅を経て結願した、玄奘三蔵の菩薩行にも通ずる画伯のたゆまぬ精進と努力の結晶です。

本展では、壁画制作のために描かれた小下図・大下図・素描画のほか、およそ30年の取材旅行で描かれた約4千点・150余冊のスケッチブックから厳選したもの、そして写真資料などを展観し、平山芸術の背後にある努力精進の軌跡をご紹介します。



◀第1場面「明けゆく長安大雁塔」(小下図)

●大唐西域壁画●

「眼に見えた玄奘の歩いた風物だけでなく、玄奘の心の奥底に触れたいと願った…」平山画伯の壁画は13面・7場面からなる。

(1)明けゆく長安大雁塔
(2)嘉峪関をゆく
(3)高昌故城
(4)西方浄土須弥山
(5)バーミアン石窟
(6)デカン高原のタベ
(7)ナーランダの月

▶「バーミアン石窟大石仏」(素描画)玄奘三蔵の足跡をたどる旅は、昭和43年7月28日、このバーミアンからスタートした。現在、イスラム原理主義勢力・タリバンの破壊工作により大石仏は跡形もない。

インフォメーション

●共催●青森放送(株)／平山郁夫美術館／日本経済新聞社
●入館料●一般¥800(640)／学生¥400(320)／小・中学生¥200(160)
※(　)内は20名様以上の団体及び前売券
●前売券取扱所●青森市松木屋セゾンチケット／紀伊国屋書店弘前店／イオン柏ショッピングセンター／イオン下田ショッピングセンター／八戸市三春屋プレイガイド／成田本店とわだ店／むつ松木屋／七戸町商店会／七戸町銘書堂／七戸町丸美屋商店／ジャスコ七戸店
●友の会会員の皆様は特典通りご入館いただけます●

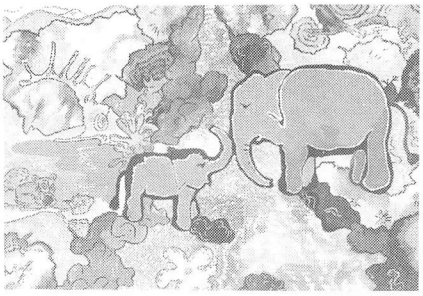
◆平山郁夫画伯《大唐西域壁画》関係略年譜◆

●昭和５年、広島県瀬戸田町(生口島)に生まれる。
●昭和20年、広島で原爆投下に出くわし放射能を浴びる。
●昭和22年、東京美術学校(現・東京藝術大学)日本画科予科に入学。
●昭和27年、同校卒業。前田青邨のもとで新制東京藝大日本画科副手(翌年助手)となり、以来平成７年学長で退官するまで奉職。
●昭和28年、第38回院展で初入選、以降入選を重ね院展を中心に作品を発表。
●昭和34年、第44回院展に《仏教伝来》が入選。自身、「画家としての本当のスタート」という転機となる。
●昭和39年、日本美術院同人に推挙。
●昭和43年、アフガニスタンから旧ソ連領中央アジア諸国を取材。
●昭和44年、インド、スリランカ、カンボジアの仏教遺跡を取材。
●昭和48年、アレキサンダー大王東征路の考古学的調査団に参加。陸路シルクロードの遺跡を取材。
●昭和49年、アフガニスタン、パキスタンを取材。
●昭和50年、日本美術家代表団の一員として、北京、大同、上海、西安などを訪問。日本文物美術家友好訪中団団長として再度中国を訪問。
●昭和51年、故・高田好胤薬師寺管長との間で、玄奘三蔵を讃える壁画の制作と伽藍建立の計画が具体化する。
●昭和52年、ローマ、トルコを取材。その帰途北京で「日本と中国」紙代表団に合流しチベットを訪問。
●昭和53年、「日本と中国」紙(日中友好協会)代表団長として、中国新疆ウイグル自治区を訪問。
●昭和54年、中国に取材旅行、初めて敦煌の莫高窟を見学。取材と美術映画「平山郁夫シルクロードを行く」の撮影のためパキスタンとシリアを訪問。
●昭和55年、薬師寺玄奘三蔵院壁画絵始めと平山郁夫絵所開きの式が、故・高田好胤薬師寺管長によって執行される。インド、ネパールの仏蹟を取材。
●昭和56年、インドのカシミール、ラダック地方、中国新疆ウイグル自治区、ネパールでヒマラヤを取材。
●昭和57年、東京藝大大学院生の中国古美術研修旅行に同行し故宮博物院、雲崗石窟、龍門石窟などを見学。パキスタンのカラコラム・ハイウェイを取材。東京藝大敦煌学術調査団の予備調査で敦煌を訪問。インドの仏蹟を取材。
●昭和58年、インドのカシミール、ラダック地方を取材。東京藝大第一次敦煌学術調査団を率いて敦煌を訪問。中国江南を取材。
●昭和59年、外務省の日本中国交流促進代表団の一員として中国を訪問。11月18日、薬師寺玄奘三蔵院起工式挙行。須弥山とその下を歩くらくだの下図に故・高田好胤薬師寺管長と共に手形を押し、署名した。
●昭和60年、インドのラジャスタン、中国を取材。東京藝大第二次敦煌学術調査団を率いて敦煌を訪問。
●昭和61年、NHK「大黄河」の取材に同行。新疆ウイグル自治区を中心に取材、はじめて楼蘭を訪れる。ネパール、インドで仏蹟を取材。
●昭和62年、東京藝大第三次敦煌学術調査団を率いて敦煌を訪問。
●昭和63年、河西回廊、カラホト遺跡、インドを取材。
●平成元年、日本楼蘭学術文化訪問団の団長として、新疆中国ウイグル自治区の楼蘭を訪問、遺跡を取材。インドを取材。
●平成５年、文化功労者として顕彰される。外務省の中央アジア文化交流促進代表団の一行とカザフスタン、ウズベキスタンを訪問。
●平成８年、中国(洛陽・北京・西安・敦煌)を取材。
●平成９年、インド南部、中国青海省・寧夏自治区を取材。故郷・瀬戸田町に平山郁夫美術館開館。
●平成10年、文化勲章受章。
●平成12年、薬師寺玄奘三蔵院《大唐西域壁画》が完成。同院大唐西域壁画殿で最後の一筆が入れられた。
※参考／「薬師寺玄奘三蔵院《大唐西域壁画完成記念》平山郁夫－大下図・ｽｹｯﾁ帖・素描画・資料展－」図録

鷹山宇一記念美術館の特別企画展／秋・冬【Part 2】

11月23日(金)→12月16日(日)会期中は無休

JQA 第1回地球環境世界児童画コンテスト 優秀作品展
■■併催■■
第1回鷹山宇一記念美術展 入賞作品展



▲JQA特別賞受賞作品。テーマは「自然があるまち」Perera Gaurava Jayasanka（スリランカ・12才）。第1回展では13,546点の応募作品の中から国内25点、海外47点の優秀作品が選ばれました。

日本品質保証機構（JQA）のISO認証登録業務開始10周年を記念して開催された児童絵画コンテスト、その第1回展から優秀作品をご紹介します。

世界各国の子どもたちに「地球を救う君たちへ」と呼びかけ、身近な生活や遊びを通じて地球環境について考えてもらいたいという願いから企画され、第1回展には日本を含む世界47カ国から、13,546点もの応募がありました。

新しい世紀を迎え、地球環境への脅威に対する認識が一層高まっているなか、応募作品の一つひとつからも、環境問題とその解決が子どもたちの関心事であることがよく分かります。また、子どもたちの作品には、身の回りの環境に関する夢や理想だけでなく、今彼らが何を考え、何を夢見、何を望んでいるのか？これらを知る手がかりも秘められています。

このコンテストでは、毎回異なるテーマを3点掲げ、その中から子どもたちが好きなテーマを選んで自由に描いてもらいます。第1回展では、「自然とあそび」「リサイクルってなあに？」「自然がある都市（まち）」の3点をテーマに、世界各国の子どもたちから作品が寄せられました。

本展は、様々な国の子どもたちが共通のテーマで作品を描く、豊かで暖かい感性にあふれた児童画の国際交流展ともいえましょう。

また、会期を同じくして「第1回鷹山宇一記念美術展入賞作品展」を併催します。

青森県上十三、三八、下北地方在住の小・中学校児童・生徒を対象に、ただ今作品を募集中の絵画コンクールから入賞作品をご紹介するものです。

この絵画コンクールは、鷹山宇一の画業を顕彰するとともに、「子どもの感性は風土の中で培われる」との精神の下、新しい時代を担う子どもたちに、制作体験をとおして豊かな感性を養い、自由な創造の喜びを味わっていただけたらと願い開催するものです。応募締切は平成13年10月28日。テーマ、画材、技法、素材は自由で、四つ切り大画用紙以内の大きさで平面のものとします。詳細等ご興味がおありの皆様、美術館までお問い合わせ下さい。

●入館料●一般￥500(400)／学生￥300(240)／小・中学生￥100(80)
※（）内は20名様以上の団体料金
●問合せ●鷹山宇一記念美術館
TEL 0176(62)5858

美術館日誌

【6月】

◇友の会総会及び美術講演会開催。「父・鷹山宇一を語る」と題して鷹山館長講演（2日）
◇「春季二科展」最終日、総入館者数3,929人（3日）
◇展示替え作業のため臨時休館（4日～5日）
◇「第61回国際写真サロン展」初日（6日）
◇七戸ロータリークラブ創立35周年記念祝賀会に鷹山館長出席。その記念事業として当館へ絵画購入資金10万円を御寄付戴く（9日）
◇「七彩会」油絵教室開催（10日）
◇大野女性学級40名様ご来館／火曜サロン開催（12日）
◇千葉学園高校3学年197名様を対象に柏葉館で鷹山館長講演、その後ご来館／西部センター女性学級40名様ご来館（13日）
◇七戸職業能力開発協会21名様ご来館（14日）
◇「第61回国際写真サロン展」最終日、総入館者数955人／当館を会場に全日本写真連盟青森県本部主催事業・写真教室とモデル撮影会開催（17日）
◇展示替え作業のため臨時休館（19日～22日）
◇「七彩会」油絵教室開催（24日）
◇版画家・佐藤米次郎氏ご葬儀に鷹山館長参列（29日）
◇アニマシオン七戸主催「デュオ・ノルテ」コンサート開催（30日）

【7月】

◇東北町立東北中学校で鷹山館長講演（4日）
◇青森県信用金庫黒石支店レディースサークル32名様ご来館（5日）
◇三沢市立古間木中学校で鷹山館長講演（10日）
◇展示替え作業のため臨時休館（10日～19日）
◇三沢市立木崎野小学校で鷹山館長講演（13日）
◇友の会研修旅行で津軽海峡三厩美術館を訪問（15日）
◇「藤子・F・不二雄の世界展」オープニングレセプション、記念講演会開催（19日）
◇「藤子・F・不二雄の世界展」初日（20日）
◇当財団平成13年第2回理事会開催（21日）
◇十和田湖子ども会45名様ご来館（24日）
◇県営農大学校43名様、こひつじキャンプ27名様ご来館（25日）
◇エフエム青森「藤子F展」を電話生取材（26日）
◇八戸市立白銀中学校29名様、春日台子ども会48名様ご来館（28日）
◇県立弘前中央高校20名様ご来館（29日）

【8月】

◇開館記念日、夜8時まで延長開館を実施／板柳町商工会7名様、国道394号整備促進期成同盟会43名様ご来館（1日）
◇七戸町教育委員会主催遠野市児童・生徒交流事業で24名様、あゆみ珠算教室46名様、蛯川子ども会10名様、草の芽子ども会様ご来館（2日）
◇七戸町教育振興会郷土学習で13名様ご来館（6日）
◇RABテレビ「出会いふれあい生テレビ」に鷹山館長出演（7日）
◇青森県土地改良事業団連合会20名様ご来館（10日）
◇美術館2階に東奥日報社「七戸町移動編集局」を開設（11日～12日）
◇「藤子F展」入館者1万人達成（12日）
◇RABラジオ生放送で「藤子F展」を紹介、鷹山館長出演（16日）

▲開館以来の入館者15万人目となった田本悦子さん。

◇当館平成6年の開館から数えて総入館者数15万人に達成／二川目学童保育20名様ご来館（17日）
◇第13回七戸川放魚会15名様ご来館（20日）
◇岩手日報社八戸支社当館を取材（21日）
◇県立七戸養護学校高等部23名様ご来館（24日）
◇友の会役員会開催／「藤子F展」入館者2万人達成（25日）
◇1日の入館者数開館以来最高の1,707人を数える／中里町立中里中学校成人教育委員会22名様ご来館（26日）
◇県立七戸養護学校中学生11名様、七戸町立城南小学校98名様ご来館（27日）
◇七戸町立城南小学校124名、七戸町立倉岡小学校16名様ご来館／エフエム青森「藤子F展」を電話生取材（28日）
◇七戸町立七戸中学校6名様、八戸市立吹上小学校45名様、天間林村立東小学校52様ご来館（30日）
◇県立七戸養護学校中学生11名様、天間林村立東小学校60名様ご来館（31日）

父 鷹山宇一を語る

友の会講演会を開催

第3回となります友の会主催の美術講演会は、例年どおり総会終了後美術館2階の工房を会場に、多くの会員の参加をいただき開催されました。

今回は鷹山宇一先生のご長女でいらっしゃる鷹山ひばり館長が、ご自身の記憶や調査をもとに鷹山家のルーツまで遡り、宇一先生の生い立ちについて語ってくださいました。

はじめに鷹山画伯が旧制青森中学時代に棟方志功や松木満史らと出会うまでが、次号からは上京してからの画家として父としての鷹山宇一が語られることになります。

平成13年6月2日開催

本日は父、鷹山宇一の生い立ちについて話をさせていただきます。

いつ鷹山が七戸にやってきたのかを調べました。

七戸町史によりますと、七戸隼人正信の採用した家臣、給人名に、享保14年小山田利右衛門、弟、鷹山立憲が【七戸御役医三人扶持】と書かれ、又、鷹山立益、一八石【七戸御給人身帯書上帳写】と記されています。その後、天間林村史に、上北郡、郡役所の移転問題で七戸側と野辺地、三本木同盟との間に乱闘事件があり、この事件の詳細は鷹山雅益の「七戸近代史」に譲る、と書かれ、ここにも鷹山の名が出てきます。そして、明治九年「天間舘外六ヶ村戸長役場」が設けられ戸長として鷹山宇太郎が就任しています。天間林村史最初の村長、鷹山宇太郎とあり、この宇太郎は父の祖父にあたります。

宇太郎は鷹山の養子で妻「すま」が鷹山家の長女であり弟と妹がいました。この妹が七戸の盛田旅館のキク伯母さんの祖母となっています。鷹山家は子供に恵まれず、直系だけで細々と血を継いできたため一家族でも多く鷹山姓を守るため長女すまに養子を迎えました。

すまは、この、現十和田市の滝沢家からやってきた宇太郎との間に六人の子供がありました。お役医の家に養子に来た宇太郎は男子全員を東京の医専に、女子も専門学校に行かせながらも皆、20代の若さで早死にしました。宇太郎とすまはそれぞれの血縁から男女を連れて夫婦縁組をして長男「宇一」が生まれました。父宇一が生まれた時、宇太郎、すまは狂喜し、特にすまは鷹山の嫡子となった父に「かまどの灰までお前のものだ」と言い続け、父を溺愛しました。このすまが逝去した時、父はすまと同じ布団に入り、冷たくなった祖母の体をさすりながら一晩中、ただ泣き続けていたと後年私に話をしておりました。

父は小学生時代に、雪が降ると使用人が父を背負い学校まで連れて行ってくれたとよく申しておりましたが、この時、一級上の槇哲夫博士や藤島均先生達と共に青山哀囚先生の教え子となりました。青山哀囚先生は当財団の青山浄晃理事長の岳父で、代用教員として七戸尋常小学校に奉職されていました。青山先生は当時、大人気だった、鈴木三重吉の「赤い鳥」を、わざわざ東京から取り寄せをして子供たちに読み聞かせ、多感な少年達は食い入るように聞き入っていたそうです。

私は三姉妹ですが、「ひばり、ちどり、くるみ」の名はこの「赤い鳥」から父がつけたものです。「ひばり」は上げひばりの如く、大空に向かって真っ直ぐに進むようにと願い「赤い鳥」に載っていた、土井晩翠の「ひばり」の詩から、「ちどり」は啄木の「きらきらと氷り輝くちどり鳴く」、「くるみ」は、三重吉の「くるみ」の詩から、それぞれとりました。

今でも「ひばり」の名前は滅多にありませんが、通学定期券を買いに行くと、芸名ではなく、本名を書くようにと、よく注意されました。私たち三姉妹の存在が周知されると、妹が先に定期券を買い求めたとか、ちどりちゃんがまだ来ていないとか、窓口係と仲良くなって情報提供を受けるまでになりました。

大正11年旧制青森中学に入学した父は、馬車に乗って七戸を離れる日に、親族や小作人の人たちが手に手に日の丸の小旗を持って盛大に見送りをしてくれて、身が引き締まる思いで青森に向かったと話をしていました。青中時代に棟方志功、松木満史らに出会い、父の作家としての歩みが始まります。

父が青森中学に入学して間もない頃、学校の傍らの合浦公園で、一人の異様な若者を見かけ大変興味を覚えたと申しておりました。

その若者が古手のフロックコートを着て、手に画架と絵具箱を下げ歩いてくると、子供たちが集まり、若者を取り囲むそうです。写生が始まるとテレビン油につけた絵筆をキャンバスと共に洋服の袖や胴に擦りつけては拭うので、キャンバスの上に絵具が盛り上がるにつれて、彼の着ているフロックコートも色とりどりの絵具だらけとなったそうです。まわりを囲んでいた子供たちは大喜びで、騒ぎ始めると、彼は大声で「有難うございました」と叫び、帽子をとり深々と丁寧に一礼して、公園から立ち去るそうで、父は暫くの間、呆然としてその後姿を見送っていたと申しておりました。

この棟方志功と出会ったことは、父の画業人生の大きな出発点でありました。

志功と共に、松木満史らが結成していた青光画社に父は加わり、切磋琢磨をして互いに学びの場としていきました。後年、志功と父が一緒になると、「松木はアホで俺たち二人は天才だ」と言い、松木と父、志功と松木が一緒になると、いない者の悪口を散々言うのが当たり前になったため、二人に会う時は、どんなに具合が悪くとも、父は必死で出かけたと言っていました。恐れを知らない、ただ一筋に信じてきた道を駆け巡っている若者たちの熱情が、痛い程伝わってくる話で、私は大変面白く聞いておりました。

【次号に続く】

津軽半島バスの旅ー津軽半島最北の美術館を訪ねて

研修旅行記 ◆◇◆◇◆ 新田 純治

美術館友の会会報が、6月下旬に届きました。普段はあまり読むことがなく机のどこかに静かにしまわれていることのほうが多い会報でしたが、今回はあることが気になっていたのでゆっくりと最初から最後まで一気に読みました。最後のページにあった「平成13年度国内研修旅行」の項が目に飛び込んできました。記事の中にあったお誘いの文章に惹かれ早速電話をかけました。ひばり館長さんの丁寧な対応で申し込みが終わりました。

出発当日、少し早めに公民館に行くと、もう早いもので盛田さんご夫妻が来ていて受付などを始めていました。出発時間が近づくにつれてだんだん参加者も集まってきました。

参加者一行は、町のバスにゆったり乗って三厩を目指して定刻に出発しました。途中蓬田村の玉松海岸にある海水浴場で休憩を取り、体をほぐしました。大きなカモメにびっくりしたり、アイスクリームをなめたりしてまた出発です。海岸線をしばらく走り今日の目的地の津軽海峡三厩美術館に着きました。

昔の学校がそのままの姿で我々一行を静かに迎えてくれました。

中に入ると教室が展示室や体験室などになっていて、ゆったりとしたスペースに鷹山宇一先生をはじめ、棟方志功や阿部合成、工藤甲人、関野準一郎など本県出身の美術家の先生方の作品を中心とした展示がなされていました。一行は、それぞれ思い思いに好きな絵を心ゆくまでゆっくり鑑賞していました。また、教室の展示場には青森市出身の画家・木部一樹さんの野鳥や植物をテーマにした作品も飾られていました。お昼は館長さんのご好意により美術館の一室を貸し切って、名産のワカオイ（昆布の幼生）のおにぎりをメインにした海のご馳走でした。ゆっくり昼食を済ませ、美術館をでたみんなの手には、それぞれお土産の白い袋が下がっていました。

帰りは竜飛岬により、灯台のある高台から夏の津軽海峡を見たり大きな風車に感動したりして、元気のいい方は国道339号「階段国道」を歩きました。それから、竜泊ラインを通り日本海側に抜け、小泊、市浦から蟹田へ出て青森経由で無事七戸へ夕方5時頃帰りました。

この津軽半島バスの旅は大変楽しく、有意義でした。また今度も参加しようと思ったのは、私だけではなかったようです。

▶参加者18名そろって美術館正面玄関前にて記念撮影。前列中央の男性が館長の牧野さんです。

10/21（日）開催 友の会国内研修旅行★第3弾！

岩手県立美術館開館記念展鑑賞の旅

色彩の歓び……メルツバッハー・コレクション展

■開催日時■
10月21日（日）
出発…午前8時
解散…午後7時頃
※共に七戸中央公民館
■会　費（予価）■
お一人様¥4,000
（交通費、昼食代、入館料込）
■募集人員■
30名（先着順）
■締め切り■
10月14日（日）
■申込み・問合せ■
美術館まで
TEL 0176(62)5858

10月6日、盛岡市に岩手県立美術館がいよいよ開館します。今回の友の会研修旅行は、その開館記念展第1弾として企画された「メルツバッハー・コレクション展」鑑賞の旅です。

メルツバッハー・コレクションは、スイスの実業家、ヴェルナー・メルツバッハー夫妻が30年以上に渡って作りあげたもので、非公開の個人コレクションとしては世界最高水準にあり、第一級の近代美術館に匹敵するほどの質の高さを誇ります。その内容は、モネ、ルノワール、セザンヌ、ゴッホなどの印象派・後期印象派の画家たちはもちろんのこと、ピカソ、クレー、モディリアーニなどなど、19世紀後半から20世紀全般に及ぶものです。しかし、何といってもその最大の特徴は、「鮮やかな色彩」。マティス、ドラン、ブラック、ヴラマンクなどのフランスのフォーヴィスムと、キルヒナー、ノルデ、カンディンスキーらドイツ表現主義の作品が大変充実しています。

そのメルツバッハー・コレクションから精選された80余点の秀作が展示される今展。ヨーロッパ近代絵画の巨匠たちによる色彩の競演を是非お楽しみ下さい。

友の会海外研修旅行

「イタリア★ルネサンス紀行」参加者募集！

お待たせいたしました。いよいよ海外研修旅行の参加者を募集いたします。第一次募集の締切は、平成13年12月25日（火）。希望者には平成14年1月から旅行代金の積み立てを開始します。皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さい。詳細は同封のチラシをご参照下さい。

【問合せ・申込み】美術館まで TEL 0176(62)5858

●開催時期（予定）●現地8泊・機内2泊 平成16年1月中旬～下旬の11日間
●募集人員●友の会会員30名
●旅行代金（概算）●¥320,000
●コース●七戸町→東北新幹線八戸駅→東京駅→成田空港→【機内泊】→パリ経由イタリア・フィレンツェ（2泊）→ローマ（3泊）→ヴェネチア（1泊）→ミラノ（2泊）→【機内泊】→成田空港→東京駅→八戸駅→七戸町※詳細はチラシをご参照下さい
●第一次募集締切●平成13年12月28日

編集後記

大盛況だった藤子・F・不二雄展も終わり、次の平山郁夫展までちょっと一息。他の市町村の方々とお会いするたび、「どうして七戸はこんなにいろいろな企画ができるのか」と言われる今日この頃。町民としても、そして友の会会員としても、美術館のおかげで鼻高々です。